

中村和郎先生の使命感

小林 茂

私は1974年4月から1979年3月まで都立大学理学部地理学教室の地誌学講座に勤務した。戸谷洋教授(地形学, 1923-2002年)のもと、中村先生は助教授をつとめ、講義のある時期は毎日のように昼食をともにし、毎週のゼミにも参加した。ただし、中村先生と私の関係が強まったのは、むしろ都立大学を離れてからのように思われる。

以下、当時のことを思い出しながら、中村先生が地理学のいくつかの課題について、使命感を持って臨んでおられた様子を紹介したい。

1. 九学会連合「日本の風土」

1979年4月に福岡の九州大学教養部に着任してほどなく、中村先生とともに日本地理学会より九学会連合の共同研究に参加することになった。九学会連合は、日本地理学会が1948年から参画してきた共同研究のための組織で、日本民族学会(現日本文化人類学会)や日本民俗学会、日本社会学会など隣接分野の研究者が統一的なテーマで研究を重ねていた(矢澤, 1990)。中村先生と私が参加した時は、初期の「対馬調査」以来「奄美調査(第2次)」までつづいてきた国内の特定の地域を対象とする研究から、「日本の風土」と、やや大きく視角を転換した時期となる。

この調査になぜ私が参加することになったのかは、今となってはよくわからない。「気候風土」といわれるように、テーマからして気候学者の参加が望ましいと考えられて、中村先生が選ばれた可能性は高い。それから中村先生が私を指名したのではないかと想像している。私の場合は、都立大学在任中に「風土論と地理学」と題するレビュー論文(小林, 1977)を書いていたことが考慮されたのであろう。そこでは「風土論」と銘打たれた研究を批判的な角度から検討し、多くのシニアの研究者には、不遜な若者の小生意気な論評と受け取られたようである。

ともあれ日本地理学会から参加された中村先生にとっては、この方面の研究として何か意義のある仕事をする義務感があったことが明らかである。「風土」という言葉は多義的で、自然環境のなかで生活する人間の文化に関連するさまざまな議論が風土論とすれ

ば、9つの学会から派遣された研究者のなかで、もっとも積極的に活動すべきは地理学者とつよく意識されていたと想像される。九学会連合では、共同研究の成果を順次示すことになっており、中村先生はまず「地理学と風土」と題するレビュー(中村, 1981)をその専用雑誌である『人類科学』に執筆された。

中村先生は海外の人類学分野の環境関連研究の学説史をわかりやすく紹介するとともに、地理学が積み上げてきた「環境決定論」vs.「環境可能論」以降の議論も合わせて論評し、和辻哲郎の有名な風土論に対しては、当時「新しい地理学」の一環として登場していた環境認知研究を詳しく紹介した。中村先生は1980年に東京で開かれた国際地理学会に際して刊行された英文の日本紹介書 *Geography of Japan* に執筆した論文(Nakamura, 1980)で、あたかも実体のように語られる「東日本」と「西日本」について、「日本人ならば大部分がおおよそその共通の了解をもって意識している東西日本は、均質地域としてでも機能地域としてでもない」としつつ、「地理学的知識としての地域区分ではなくて、もっと主観的なものであると思われる」と喝破され、二項対立的な枠組みによる認識として解説していた。和辻哲郎の構想した風土論にちかい領域での検討を、より分析的、明示的に開始していたわけである。

こうしたレビューだけでなく、実際の研究でも地理学の立場を鮮明に示す必要もあり、たまたま私が琉球列島の石灰岩台地での水田農耕に関心を持っていたので、一緒に奄美諸島に出かけた。1回目は徳之島をフィールドとし、のちに鹿児島大学教授になった森脇 広さん(地形学)に同行していただいた。2回目は沖永良部島へ行くこととなり、サンゴ礁研究者の中井達郎さん(やはり当時都立大の大学院生)が参加した。

水田農耕に不可欠な用水に関連して、中村先生は琉球列島の降水パターンを中心に季節推移の認識について住民にインタビューを行うとともに、合わせて鹿児島～石垣島の降水量と可能蒸発散量(ソーンズウェイト法による)の収支を半旬別に追跡する図を作って下さった。この結果、琉球列島は単に暖かいだけでなく、梅雨明けに顕著な乾季(降水量より

も蒸発散量が多い時期)を伴うことが明示され、それは住民の認識ともよく一致することがわかった。

他方、森脇さんと中井さんには、天水田の多い石灰岩台地上の水田の観察を手伝っていただいた。サンゴ礁が隆起してできた石灰岩は割れ目が多く、透水性が高い。そうした水田での漏水防止のための農作業について、住民の方から詳しい教示を得て、おかげでなんとか江戸時代の薩摩藩が出した水田準備作業(おもに漏水防止を目的として、ウシを水田に置いて踏ませる)の指示に関する古文書を読みこなすことができ、その成果は小林(1983)として『人類科学』に掲載された。

当時水田に家畜を入れて踏ませるこの技術は、東南アジアの低湿な水田でみられる同様の技術との関係が注目されていたが、両者の外見は類似するが、機能がまったく違うというのが私の結論であった。ただし東南アジアでも、スラウェシ南部の石灰岩地帯の水田については、やはり漏水防止を目的として家畜に踏ませる技術があり、そのタイミングなど琉球列島の場合とおどろくほど類似する(古川,1982)。石灰岩地帯に立地する水田の漏水防止のほか、いったん乾燥するとひび割れて固まるその地域特有の土壌をほぐすためにも家畜に踏ませるの必要があり、両者の系譜関係を考えるよりも、共通する環境では類似した技術が発生するのではないか、と現在は考えている。

九学会連合では、共同課題に沿った単行本を最終的に刊行することになっており、そこにはさらに「南西諸島の伝統的イネ栽培と環境」と題する長い論文を寄稿した(小林・中村,1985)。とくに琉球列島のイネの作季について文献をさかのぼって調べ、初期からその作季は日本本土と大きく違っていたこと、それは上記のような降水パターンに適合したもので、共通して梅雨明けの乾季に収穫季を合わせていることを指摘した。この成果は、その後琉球列島のイネの品種(基本栄養成長期間が長く、感光性が低い)は、本土のイネの品種(基本栄養成長期間が短く、感光性が高い)と別系統であり、琉球列島を日本本土へのイネ栽培の伝播ルートとする柳田国男の「海上の道」説は成り立たないという主張につながった(小林,1992)。

この結論に到達するまでずいぶん時間がかかったが、琉球列島のイネ栽培と本土のイネ栽培の異質性、さらに両者におけるイネ栽培の開始期の大きなズレ(琉球列島でのイネ栽培の開始は決定的に遅い)から、琉球列島の文化の独自性についてもっと本格的

に考えるべきではないかとするに至り、「日本の風土」という課題に対して、なんとか意義ある結果を示すことができたと考えている。巨視的に見れば、日本のイネ栽培には本土の系統と琉球列島の系統が併存していることになる。

2. 岩波書店刊『日本の自然:地域編』

中村先生を通じた仕事の依頼はその後もあった。その一つは岩波書店から刊行された『日本の自然:地域編』に関するもので、これに先んじる『日本の自然』(阪口編,1980)の成果をひきつぐものであった。やはり岩波書店から刊行されたこの書物は、プレートテクトニクスをはじめとするような地球科学の大転換や第四紀学といわれるような学際的な研究の展開を背景として、日本の自然を見直そうという書物で、新しい日本列島の姿を提示していた。中村先生だけでなく、貝塚爽平先生(1926-1998年)、町田洋先生、堀信行さん(いずれも地形学)も参加されて、都立大学地理学教室の研究者の貢献度の高い本であった。

これに対して『日本の自然:地域編』は全8冊からなり、阪口編(1980)で示された展望をもっと大きな縮尺で考えようという企画であった。福岡でその第7巻『九州』の編集のための予備的な会議があるので出席せよとの指示から始まった。私はまだ九州に住んで10年そこそこであり、執筆者として不適當ではないかと考えつつ出席したが、主な編者の内嶋善兵衛先生(農業気象学)に加えて九州大学名誉教授の勘米良亀齡先生(地質学,1923-2009年)がおられ、お二人の九州の自然に関連する豊富な話題に引き込まれた。

その頃は九州国立博物館の設立運動に参加して、この機関誌であった『ミュージアム九州』(博物館等建設推進九州会議)という雑誌の編集への参加を通じて、福岡在住の歴史学者や考古学者、さらに地形学者や地質学者など自然科学者と交流があった。またそれを土台に近世絵図を使った福岡平野の古環境の研究や阿蘇火山の作った火砕流台地上に開発された水田の水利の研究を始めたところで、経験不足ながら老練なお二人の話になんとかついていくことができたのも幸いであった。文科系の研究者も加えた方がよいということで、中村先生から参加の指示をいただいたと推測するが、しかし、今思い返してみると、中村先生から『日本の自然:地域編』の企画の背景や意義を事前に知らされたという記憶がない。たまたま2012年に大阪大学を定年退職したあと、

それまでいただいた別刷りを整理した際、その企画書ともいふべき「日本の自然を捉えなおす」というタイトルの文章(大場・中村, 1986)がみつき、それを読んで、先生方はこんな発想で考えておられたのか、としばし考え込むことになった。この別刷は、いただいた時にそのまましまい込んでいたらしい。

この文章では、西欧から科学を導入した際、日本ではすでに西欧で発展し、また細分化された科学分野を受け入れたため、自然や環境の認識が縦割りになってしまう、総合的にそれをながめる「自然史」の視角が弱いという指摘が前半に登場する。西欧では「自然史」から分化していった科学の伝統がまだ意識されているのと比較すると、その弱さがよくわかるというわけである。つぎのような文章は日本における自然や環境の認識の特徴をよく示している。

よく日本人は自然を愛する国民だといわれている。確かに自然を題材にした絵画や四季おりおりの自然を愛でる詩歌は多いが、絵画には自然そのものを忠実に写した作品は少なく、詩歌には自然そのものを歌うのではなく自己の感情を自然に託してあらわしたものが多(312頁)。

地球の有限性が意識され、環境問題への関心が高まっている現在、この文章に示された態度だけで自然や環境に関連する課題に答えていくのはほとんど不可能である。また科学研究は前進しているものの、細分化された知識のままでは複雑な現場に対応することができない。分野横断的で総合的な「自然史」につながるような知識が必要ということになる。

今日的な自然や環境に関する課題に対応するには、それに関する知識のリニューアルが必要であり、そのために『日本の自然：地域編』が構想されたことがわかるが、興味深いことに、これに先立つ『日本の自然』(坂口編, 1980)が、研究者間の交流により構想されたというよりは、「編集者主導型」で進められたということも記されている。社会の要請に敏感な編集者がいて、この本ができたことは注目される。また今から考えてみれば、福岡で1990年夏に開かれた第7巻『九州』の編集のための予備的な会議は、これに向けた分野横断型の討論の一環だったわけである。

今頃になってこんな大事なことがわかるというのはお粗末ではあるが、ともあれ、中村先生、そして大場さん(植物分類学)の危機意識、さらに使命感を知ると『日本の自然：地域編』が志の高い叢書として編集されたことがわかる。第7巻『九州』では有明海の干拓問題に触れたが(内嶋ほか編, 1995,

pp.119-131)、あの頃の関係者がこうした分野横断型の知識を共有していたら、今日のような社会を分断する事態には至らなかつたと思われる。とくに干拓問題の公判に関係した人びとの多くは、裁判官も含め、ふるい自然観や環境観にとらわれていたことがあきらかである。そのリニューアルは、今日もなお意識して推進する必要があることを痛感する。とくにその後発生した東日本大震災や豪雨災害を考えると、最新の研究成果を取り入れた再リニューアルの時期が近づいているのではないかと気にかかる。

ところで、そのころから私はアメリカで展開している環境史研究に関心を持ち、そのおもな論者であるクロノンが、アメリカ環境保護運動のよりどころとなってきた Wilderness 概念を批判していることを知った。手つかずの自然ともいふべき自然保護区のような場所の保存を独善的に主張するこの動きは、その地に居住してきた先住民の生活を排除しようとするだけでなく、それ以外の場所に見られる自然や環境の変化を無視することにもつながりやすい。また崇高な自然に絶対的な価値を置くこの見方は、ときにアメリカ的な自然観の輸出として、文化帝国主義にもなる、とするわけである(Cronon, 1996)。この論文は以後さまざまな議論を呼んでいるが、そうした価値観の結果を多角的に検証するとともに、自然や環境の理解には、世界のどの地域についても常時その見方のリニューアルを継続する必要性を感じる。

3. 「なぜ私は地理教育に危機感を抱いているか」

中村先生の使命感を感じた機会はまだひとつあった。1998年に私は大阪大学に転勤し、2002年になって人文地理学会の集会理事に任命された。当時すでに人文地理学会でも会員数の減少が始まっていたが、毎年秋の大会にはなお発表の申し込みが多く、これに応ずるため、ポスター発表を開始するほどであった。ただし会員の減少を憂慮する千田稔会長は、学会が今まで注目してこなかった地理教育に関する発表数を増加させ、会員数の回復を図りたいので、まず地理教育に関する例会を開くよう私に要請した。

当時高校教育が大学受験に合わせるように変化し、とくに関西では、受験科目に地理を加えていない大学が多く、その影響の実態を知りたいと、第一のスピーカーとして駿台予備校で地理を担当していた小松英介さんをお願いした。第二のスピーカーを、1996～1997年度に日本地理学会会長として文部省初等中等教育局や国会議員への陳情をくり返された中村

先生にお願いしたところ、こころよく引き受けてくださった。「なぜ私は地理教育に危機感を抱いているか」と題するその要旨は、『人文地理』の57巻3号(2005)に掲載されている。

今から思えば、人文地理学会が地理教育に注目したのは遅すぎる。高校教育の「社会科」の一部が「地理歴史科」となり、そのうち世界史が必修となって、地理と日本史を選択科目にする方向が決定されたのは1987年である(矢吹,1991)。この強引ともいえる世界史の必修化は1994年から実施され、高校の地理教育に大きな影響を及ぼしたが、他方教育現場では全面的な実施が困難で、2006年になって、必修のはずの世界史を履修していない高校生がたくさんいたことが広く知られるようになった(西岡,2008)。上部で決定すれば、教育現場でも実施できると、この問題のある政策を強行した人たちの責任が問われるようなことはなかったようであるが、途方もない失政である。当時、世界地理を学ばないで世界史が理解できるのか、という疑問がしばしば表明されたように、不用意な変更でもあった。

中村先生が日本地理学会の会長の任期を終え、その経験を踏まえて「地理学および地理教員振興のためのアクション・プログラム」(中村,1998)を書いたのは、上記のような世界史の必修化の影響が強く感じられるようになった頃である。ただし中村先生の会長就任以前は、日本地理学会として地理教育のために外部に働きかけるような活動は、他の分野の学会と比較すると低調で、「会長として責任の一端を感じる」(91頁)と述懐せねばならなかった。

日本地理学会会長として中村先生が活動されたのは、中央教育審議会がいわゆる「ゆとり教育」の推進を始めたころで、学生の「理科ばなれ」防止にむけて日本物理学会などが要望書を同審議会に提出した時期に当たる。「地理学および地理教員振興のためのアクション・プログラム」では、とくに地理を選択する生徒が減少し、地理教員の採用が減少すること、さらに非地理教員の担当する地理授業の問題点を指摘している。人文地理学会例会での発表のころには、さらに事態が進行して、地理教員の高齢化が進んで、若い人が少ないことが指摘される。網羅的な地域の学習から、教育内容を厳選した課題重視の考え方への転換が要請されているときだけに、懸念がさらに強まっていたわけである。

地理教育という、学習指導要領の変化にどう対応するかというのが議論されることが少なくないが、中村先生はHigh School Geography Projectにはじまる

アメリカの地理教育の改善運動が地理学研究者も参加したかたちで展開したことを重視されていた。これに対して日本の学習指導要領の策定には、地理学研究者はほとんど参加できないかたちで進められている。先生の発表の際に私の取ったノートには、「学習指導要領・諸悪の根源」、「問題は学習指導要領」と記され、大学の教員と中学・高校の先生方との交流や他分野の関係者との共同研究が、学会としての陳情とならんで強調されている。そのようなかたちで議論が進めば、世界史の未履修のような事態は発生するはずがない。

そのころ私は放送大学の江淵一公教授(文化人類学,1933-2007年)から同大学のテレビ授業として「人文地理学」を復活したいが、担当できないかとの打診をうけ、杉浦芳夫さんと相談しながら全15回の講義の準備を進め終わったところであった(小林・杉浦,2004)。それまで行われてきた放送大学の「人文地理学」の講義に体系性がなく、受講生も少なく、いったん廃止したが、再開してほしいとの要請で、重い課題であるが、一般教養レベルの人文地理学のリニューアルをめざして作成した教材が当時刊行・放映されたところであった。この骨格となったのは、中村先生が普及に努めた”New Geography”運動の地理学観で、「学習指導要領」のような枠にしばられず、今日的な地理学の見方を中心にしたせいも、幸い多数の受講生が選択してくれた。

中村先生の使命感を示す文章をもうひとつ挙げるとすれば、もちろん梶川勇作さん・寺阪昭信さん(1939-2022年)と連名で発表された「新しい地理学への道」(中村・梶川・寺阪,1976)である。この論文は上記のような”New Geography”が計量地理学を中核としながら欧米に登場し、旧来の地理学的前提を批判しつつ、新しい発展の方向を示していることを展望するもので、中村先生はファーストオーサーとしてその広がりを追跡する。この科学運動は、一時期の流行として受け取るのは不適切で、長期的に地理学に影響を与えるものとして理解すべきことを学界に周知するものでもあった。もちろんすでにその一部は紹介され、それに沿った論文も書かれてはいたが、個別課題を越えてより広い視角から眺めることを勧めるわけである。以後50年弱が経過し、さまざまな新研究の波が到来し、そのなかにはこの動きを否定的に評価するものもあるが、その敷いた路線は今なお強固に存続しているものが多く、GISのようにそれに親和的な手法も展開してきた。GISの活用はこの路線なくしては考えることができない。

使命感をもって新しいことを主張することは努力と勇気を要請する。ときには摩擦も覚悟せねばならない。中村先生はいつも穏やかにこれを進められた。あらためて眺めると、先生の情熱の温度は心の内ではもっと高かったのではないかと想像する。

まだ語り足りないが、ここに中村先生の活動への一つの見方を示し、合わせてご冥福を祈りたい。

(大阪大学名誉教授)

文 献

- 内嶋善兵衛・勘米良亀齡・田川日出夫・小林茂編 (1995) : 『九州：日本の自然地域編』岩波書店, 198p.
- 大場秀章・中村和郎 (1986) : 日本の自然を捉えなおす. 科学 (岩波書店), **56**(5), 312-315.
- 小林茂 (1977) : 風土論と地理学. 経済地理学年報, **23**(2), 33-44.
- 小林茂 (1983) : 奄美諸島の伝統的イネ栽培と『踏耕』. 人類科学, **35**, 69-104.
- 小林茂 (1992) : 南西諸島におけるイネ栽培の成立条件: 伝播論を検証する. 考古学ジャーナル, **352**, 15-20.
- 小林茂・杉浦芳夫編 (2004) : 『人文地理学』放送大学教育振興会, 309p.
- 小林茂・中村和郎 (1985) : 南西諸島の伝統的イネ栽培と環境. 九学会連合日本の風土調査委員会編『日本の風土』弘文堂, 167-206.
- 阪口豊編 (1980) : 『日本の自然』岩波書店, 269p.
- 中村和郎 (1981) : 地理学と風土. 人類科学, **34**, 21-43.
- 中村和郎 (1998) : 地理学および地理教員振興のためのアクション・プログラム. 地理学評論, **71A**, 90-97.
- 中村和郎・梶川勇作・寺阪昭信 (1976) : 新しい地理学への道. 人文地理, **28**(5), 32-55.
- 西岡尚也 (2008) : 高校世界史未履修問題にみる社会科教育の課題. 琉球大学教育学部紀要, **72**, 97-103.
- 古川久夫 (1982) : 南スラウェシの稲作景観. 東南アジア研究, **20**(1), 23-46.
- 矢澤大二 (1990) : 九学会連合と日本地理学会. 人類科学, **42**, 173-190.
- 矢吹芳洋 (1991) : 高校社会科の『再編』と世界史必修をめぐって. 専修大学社会科学研究所月報, **338**, 1-20.
- Nakamura, K. (1980) : Eastern and western Japan. The Association of Japanese Geographers ed.: *Geography of Japan*. Teikoku-Shoin, Tokyo, 184-196
- Cronon, W. (1996) : The trouble with wilderness. *Environmental History*, **1**(1), 7-28.